関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

# ロシヤ文学者昇曙夢の生涯と芸術を語る ―武者小路実篤 「昇曙夢の時代があった」―(平成21年度国文学会研究発表会第1回講演要旨)



| | |
|---|---|
| 著者 | 和田 芳英 |
| 雑誌名 | 國文學 |
| 巻 | 94 |
| ページ | 90-91 |
| 発行年 | 2010-02-10 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/2345 |

講　演

※「ロシヤ文学者昇曙夢の生涯と芸術を語る―武者小路実篤「昇曙夢の時代があった」―」

和田　芳英

〈要旨〉

昇曙夢は明治十一年奄美大島に生誕。昭和三十三年鎌倉市で八十年の生涯を終えた。

明治二十九年ニコライ神学校に入学。ロシア語を学び、プーシキン、ゴーゴリ等を読破。三十七年に評伝『ゴーゴリ』を出版。この頃畏敬する二葉亭四迷の謦咳に接し、二葉亭歿後一朝にして露西亜文学の権威となる。四十三年の翻訳『六人集』や四十五年の『毒の園』、大正元年のクープリン作『決闘・生活の河』は「ロシアモダニズム」として一世を風靡し、若い世代に驚異的な印象を与えた。谷崎精二は「文学の教科書」と記し、また武者小路実篤は「昇曙夢の時代があった」と回顧している。大正時代はトルストイの文学と思想が流行している。昇曙夢は雑誌『トルストイ研究』の主要メンバーであった。昭和三年には「トルストイ生誕百年祭」に国賓として招聘され、その際ゴーリキイをはじめ多くの文化人と親交をもった。

昇曙夢の最晩年の不朽の名著『ロシヤ・ソヴェト文学史』は

昭和三十年度、日本芸術院賞および読売文学賞を獲得。曙夢の蘊奥を究めた比類ない学問はわが国の文学、芸術の発展、文化の進展に大きく貢献している。生前百八十五余の著・訳書を刊行した彼は、明治年間に四百篇余、大正年間に七百篇余の論文・紹介・翻訳を行っている。だが、巷間に流布している多種多様な辞典類や近代日本文学史の記述、年表、文壇的側面史において彼の名前は不当に軽視され無視され密封されてきた。

私は二〇〇七年、奄美市名瀬において「昇曙夢歿後五十年を偲ぶシンポジウム」を開催。『昇曙夢の生涯と業績を語る』記念誌を刊行した。演者に中本伸幸・沼野充義・加藤百合（司会・和田）は成功裡に終了。この『記念誌』に対して平岡敏夫氏は「近代文学研究の重要な記念碑」と新聞紙上で高く評価した。